

「野良で考えたこと」

2011年3月～5月

伊藤 晃

~~~~~  
 私がここに書き記すことは、すでに誰かによって語られたことかもしれないし、その焼き直しかもしれない。ありそうなこととして、古くて狭く浅い思考なのかもしれない。  
 私は、ネットとか携帯電話とはほぼ切り離されている為、古いメディアに頼り、野良で考えたことばかりだからだ。  
 考慮するに値しないないようであれば、素通りしてほしい。一読してもらえたなら、誤りや不足を痛烈に批判されたいと思う。  
 ~~~~~

国策と言われるけれど

福島に原発が建設されたのは、40年前のことだ。私は、小学生だった。
 それから、5年ほどさかのぼると、「公害」が全国各地で深刻な事態を引き起こし、発覚し始めている。営利活動は目先にとらわれ、モラルはついてこなかった。人間の都合が最優先とされ、「改造」は、身の回り至る所で、色々なものを押し潰し、埋め立てていった。
 そんなさ中に、教訓を得る前に、計画は立案され、実行されたことになる。

福島原発の稼働から10年程して、私は初めて原発と出会った。

そして国策とも。

つまり、公害問題の渦中に育った私は、「成長」とか「発展」とかに懐疑的であったし、巨大技術、ことに原子力の平和利用など、ほとんど信じられなかった。

都市の、無責任な住人であった私は、反原発運動のさ中で、「原発はいりません。」の一点張りだったけれど、仙台で、女川で、柏崎で、いつも機動隊に取り囲まれた。

原発、それは国策だった。

しかし、これまで、郵政選挙というのはあったけれど、原発選挙などあったためしもなく、ましてや、その是非を問う国民投票など、一度も行なわれたことはない。

為政者の話として、現都知事の「原発をもって核武装しろ」とか、近頃では、元首相の「原発がなければ、日本は四等国」、という発言が目についただけだ。

反対意見をしつように封じ込め、電力会社は原発のイメージアップをエスカレートさせ、今日に至った。

その間、スリーマイル島、チェルノブイリにおいて、破滅的な事故が起こった。日本国内においても、中小の事故は日常茶飯、枚挙にいとまがないのは、周知の通りだ。

事故が起きて

大震災が引き金をひいた原発事故によって、海と大地と大気が汚染され、それらを共有する地球上のすべての人、生物と同様、私達も、程度は違っても、同じ被災者となった。

しかし、同時に、私達は、この国の大人として「起災者」としての責任を負う。

地震の只中に、津波の前面に、原発を置いたのも、そこで得られた電力を使い、国策を進める政府を選んだのは、私達だった。

政府はもちろん、私達も世界に向かって詫びなければならないと思う。

これは、原発の是非を問う前の前提だ。

ずっと理不尽だった

理不尽には、事故前からあった、圧倒的な不公平と、新たに際立った世界のゆがみ、とがある。

誘致とは、為政者側の言い分だ。

誘致は、たいがい誘導されてなされる。

稼ぎ手、担い手を、中央へ送り出し、人をつなぎとめる金もない、老い先が知れた田舎の町が、とっておきの財産を差し出すかわりに、原発とお金はやってくる。

電力は、地域の魂が、姿を変えたものではないか。

それは、驚く程、人々を助けてくれた。

何と言ったらよいのだろう。

枯渴へ向かう村と、蕩尽へ向かう街とがある。

いったん入ったお金は麻薬になるとは、30年前にも言われていたけれど、誘致に成功した地元代議士は大いばりで、中央でも幅をきかせたという。そうして、3号機、4号機と増設はやすやすと進んでいったのだろう。

そして、震災で傷ついた人々は、その傷が深い人程、危険からの逃げ足も失った。車を失い、情報も失い、徒歩で避難した人も多いようだ。根ざしていた風土、共に生きてきた生き物達を置き去りにして、不明となった家族、親しい人達を残し、遠く去ることができない人もいただろう。

そのさ中、中央では、被災地から遠く離れた人達が、新幹線で、車で、はるか遠方へ、避難していった。このギャップは・・・

避難所で暮らす人達は、いっそうの虚脱感、無力感と向き合わされたであろう。

日々、身の回りのことに心奪われ、「クリック」などしない人は多くを失い、「クリック」できた人は失わずにすむ。そんな可能性も現実のものとなってしまうかもしれない。

守ろうとしながらも流されていく者と、守るものもなく、世界をいじくり、作り変えていく者。

大多数が認めるように、彼の地にはかつてのこの国の景観が多く残されている。だが、そんな郷愁のようなものが、何かの防波堤になっただろうか。

「美しい国を守る」と言うような人達が、風景を作り変え、景観を黙々と守るだまされやすい人々を追いつめるのではないか？

自分の願いがどうであれ、私はもちろん、百姓のくせに、「黙々」とか「無垢」とかと無縁なものだ。話が少しそれた。

被災者は

声も小さく、撥ねのける力も弱い地域に、原発は押しつけられ、事故が起こったらそれを知る手だても逃げる力も弱い人達が被災してしまった。

生まれ育ったその土地で暮らすことが全てである人達。
そんな人を、引きはがし、退避させることで、安全を守れるという考えが見当違いだ。

「原発事故で直接的には一人の死者も出ていない」というのも、まやかした。
すでに多くの人が命を絶たれた。
去る者も残る者も解体された。

はびこる夏草を押し返し、ころころ変わる天候や、すきあらば作物を台無しにしてしまう外敵に、何とか対応できたとしても、この上五感では感知できぬ、「悪」、放射能を、新しい器官で見張るなどということが、この先できようか？

為政者は

「我欲ゆえに天罰を受けた」と言う人は、
「国威のための核武装」を言う人は、
原発が必要だと言い続ける。

安全よりも目先の利益を求める強欲が、国民に山河に放射能を浴びせ、地球を汚染させているではないか。
国際的信用を失墜させ、再度核爆弾を投下されたように、国民をヒヘイさせているではないか。

どうでもいいことだが、「四等国」への転落とはこのことだ。
為政者の矛盾を言ってもむなし。

原発のこれから～何度でも国民投票を

普通の生活者の原発に対する態度には、2通りある。
両者のへだたりは、たいへん大きい。気質の違いと言ってもいい程だ。

片や、得たもの、これから先得られるものに着目する人がいて、
片や、失ったものこれから先失われるものに暗然とする人がいる。
人の可能性は無限大と評価する人がいれば、
人の卑小さを思う人もいる。

大局は、そんな二分された状況であっても、各地の原発一基一基については、議論の余地が多分にある。今回の事故によって、問題がそのつど提起され、衆議にかける必要は確認されただろう。

また、原発が、国の在り方と深く関わっていると人々に認知された今、多くの人がある是非を問う国民投票を望んでいる。そして、その結果が人々の間に分断を招くに終わるのを防ぐためには、1回限りで終わらない、定期的な投票が必要となる。

国の在り方を決める投票なのだから、人々は何度でも問い直し、敗れた者も、次回に向け、希望をつなくことができるだろう。

事故の終結の目どが立ったら、速やかに、民意による「国策」を定める時だ。

幾度破れても、やり直し、何度でも参加する用意ができました。
大きな犠牲を払われた人々がいて、微じんであっても、私も、声を発する力を取り戻しました。

蛇足

泰子は、ネット空間には、おいしいもの、大事な栄養を含んだ果実が沢山ある、と、あっちの果実、こっちの果実と、賞味するのに忙しい。チラつく断片に漂う香りに、いつしか誘惑され、彼女の横から手に取り、むさぼり、うかさね、時を忘れてしまう。

でも、熱からさめると、「自分達にも、育てている果実があるのに」と少し後悔したりする。

その実は、ちっとも熟して来ないし、いったいどんな効用を持つかもはっきりとしない。

自分の持ち場で、納得できる、何がしかの成果を得たいのだ。けれど、他の世界を無視するつもりもないし（逆はあっても）、ここも、世界とつながっているとの確信はある。

他所のものを食い散らかしたりせず、時に大切に頂きながら、ここで研鑽を積みみたいと思う。

熟すかもしれぬ、自分達の果実の行く末を、案じたり、時にはわくわくしながら。

終わり